ペルソナ3-SW-Fes

栢木理雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ペルソナ３－ＳＷ－Ｆｅｓ

【Ｎコード】

Ｎ５３００Ｎ

【作者名】

栢木理雨

【あらすじ】

夏に起きたＯＺを、世界中を巻き込んだ事件はとある一族と少年達の活躍により無事終結した。

夏休みも終わり始まった新学期。文化祭へ向けて浮かれムードな中、ＯＺではとある噂が流行っていた。

広がる、一年前の悪夢。電子と現実の両方から襲いかかる影。そして一一一一

「私、湊くんが……」

恋も戦いも大忙しの秋が、今、始まる。

※この作品を読まれる前に前作のペルソナ３－Ｓｕｍｍｅｒ　Ｗａｒｓ－を読むことを推奨します。

プロローグ（前書き）

前作が完結した日にあげるって言ってたのが懐かしい。

そんなわけで新作です。またまたよろしくお願いします！

では、始まり始まり。

プロローグ

「いらっしゃい」

「遅れてしまってすいません」

陣内の本家を、赤く長い髪の女性が訪れていた。
万里子はその女性を迎え入れて、仏壇まで案内する。

「学生に代表に忙しいでしょう？　　無茶はしちゃダメよ？」

「はい。しかし……本当に惜しい人を亡くされた」

線香をあげて手を合わせ目を瞑る。少しして目を開き、女性はそう呟いた。

「それはあなたのお父さんもでしょう？」

「そう、ですね。父の名を貶めないように私も気が抜けません」

「あなたなら大丈夫よ、美鶴ちゃん」

「ふふ、万里子さんにかかっては私もまだちゃんですか」

ニコニコ笑顔で麦茶を差し出す万里子に美鶴も笑い、麦茶を貰う女性一一桐条美鶴。
大学生になった彼女は後期の講義が始まっているのだが、今日はこの為に自主休講して車を走らせて来たのだ。

「これは、写真ですか？」

「ええ、母さんの葬儀の時にね。みんないい笑顔でしょう？」

「はい」

チラリと見れば、確かに全員が栄の遺影に負けず劣らずの笑顔を浮かべている。

「ふふ、ほら、夏希なんて完全に恋する乙女だし」

「？？」

幼い頃から父に連れられて陣内本家へ来ていた美鶴は夏希とも面識があった。
最後に会ったのが数年前だったが、写真の夏希は可愛らしい少女へ成長しており、隣にいる人間を意識してるだろうその表情に美鶴は小さく笑ってしまった。

「隣にいるのは、恋人ですか？」

「クラスメイトだそうよ。最初は母さんを喜ばそうと夏希が連れて来た偽装彼氏だったの。けど、最終的に惚れちゃったみたいね」

「なるほど」

凄いことをする子だ、なんて思いながら隣の人間一一有里湊へ視線を向け、美鶴は息を呑んだ。

「……何故」

「美鶴ちゃん？」

その容姿を忘れることはなかった。忘れるわけがなかった。自らの命を以て人々の死を望む意思からニュクスを守り、封印した彼女の仲間であり、リーダーをしていた彼を。

「有里……湊……」

「あら、美鶴ちゃんの知り合いなの？」

「……ええ、月光館時代の後輩です」

「あ、そういえばそんなことを言っていたわね。月光館からの転校生だって」

バカな。と内心では酷く狼狽していた。彼は死に、葬儀も行った。大学生になってから、ちゃんと墓参りにも行ったのだ。なのにその彼が”転校生”？

「とてもいい子ね、彼」

「そう、ですね」

一一本当にキミなのか、湊。

美鶴の疑問を晴らすモノは何もなく、彼女は数分後陣内本家を後にしたのだった。

一一一一一一一一一一一一一

「おはよ、湊くん」

「おはよう」

駐車場で湊の姿を見かけた夏希は、すぐにその隣へ並んで笑いかけた。
新学期が始まってもう二週間が過ぎたが、他の生徒一一主に男子一一は湊と夏希の関係を怪しんだ。
夏休みが終わってから急激に親しくなっているのだ。名前の呼び方も変わってるし。
付き合ってるのかと聞けば、ノーと返って来る。夏希に聞いてもノーだ。その時、いつも夏希はやや怒り気味になるのだが。

「湊くん、今度の土曜日って暇？」

「暇だよ」

「なら、うちの部活見に来ない？　後輩指導なんだけど、合同練習でね」

良ければその後一緒にお昼でも……なんて考えてるのは秘密である。あれから直美達にいろいろ言われて夏希なりにアタックしてるのだ。最大の協力者が両親なのはどうなのかと思うのだが。

「いいよ。じゃあ、お邪魔します」

「うん！」

それから二人は談笑しながら教室へと向かって行った。
夏休みが終わって、湊自身もかなり変わっていた。第一に、表情が豊かになった。普段こそ眠そうだが、笑う時は笑うし困る時は困る。怒ることがまるでないのが不思議でならないが、高三で怒りまくりなのも問題だろう。そんな風に表情豊かになり、しかもちゃんと会話をするようになれば、湊がただ者でないことは簡単にわかられてしまう。
基本的に学年一位の学力に、運動させても上位近くに食い込む運動神経の良さ、何の手入れもしてないのに魅力的な容姿と、湊の人気が上がるのは時間の問題だった。

「有里くん、篠原さん、おはよう」

「おはよう」

「おはよっ」

十月の頭にある文化祭に向けて、各クラスとも徐々に装飾が飾られ始めた廊下を歩きながら二人は挨拶を返していく。
二人のクラスは喫茶店だからか、そこまで準備は大変ではなく、装飾はそこまでついていない。けれど、雰囲気はどことなく浮かれていた。
去年文化祭が流れてしまった湊としては、内心結構楽しみだったりするのは秘密である。

一一一一一一一一一一一一

「ふー、九月って言っても暑いなぁ」

「だね。湊先輩はどうしてそんなに涼しそうにしてられるんですか？」

「どうしてって、別にそこまで暑くないと思うよ」

若干汗を滲ませる健二、佐久間を他所に湊は汗もかかずに首を傾げていた。
実際、九月に入って涼しくなったと思っているし、作る料理も秋のモノにしようと思っている。

「ま、なんか先輩がおっさんみたいにあちーって言うのもキャラじゃないか。うし、今日もバイトやるぞ、健二」

「うん」

あの夏の一件以来、二人のバイトの給料は跳ね上がった。ＯＺが直々に二人へ仕事のオファーをかけており、正社員顔負けの仕事をこなしているのである。

「っと、またこいつかよ」

「わ、僕のとこにも来てるよ」

ＯＺの管理システムの一部を引き受ける二人は一般アバターからの

連絡を受け取ったりしている。そのようなアバターは他にもいるのだが、夏の事件以降、この二人に集中しているのだ。

「何か来てるの？」

「ここ毎日来てるメールですよ。嫌がらせには見えないけど、ちょっと怖くて」

二人のディスプレイには、ただひたすらに「たすけて」と打ち込まれたメールが表示されていた。
文字容量をそれだけで埋めてられそうなそのメールは、確かに恐怖心を煽るかもしれない。

「これで三日目なんです」

「アカウントは？」

「えっと……リコさん、て名前です」

「……試しに話を聞いてみない？」

「「え？」」

「不気味なら、聞いちゃった方が早いかもしれないよ。無視し続けて気にするより」

「それは……」

「嫌がらせならＯＺに報告すればいいし。それに、気にならない？」

「……先輩って、怪奇現象とか起きるとそこに言って原因を確かめようとするタイプですよね」

「よくわかったね」

それでよくゆかりに怒られたな……なんて思い出しながら、湊は笑った。
佐久間は呆れたようにため息を吐いて、それから差出人へとメールを送っていた。話を聞くから、今から指定した場所に来いとの内容のようだった。

「けど、確かにうやむやにするより全然いいかも知れないっスね。お、返ってきた。よし、行こうぜ健二」

「うん。でも……はぁ、イタズラでないことを祈るけど、イタズラでなかったらどうすればいいんだろう」

「まずは話を聞いてからでいいと思うよ。僕もついて行っていい？」

「はい」

「もちろんっスよ」

ありがとう。と湊は微笑んで、ログインしたのだった。

一一一一一一一一一一一一一

「えっと、あなたがリコさん？」

「……はい」

メールの送り主は三人が着いた時には既にそこにいた。
ミナトと同じ犬タイプのアバターの女性のようだ。アバター越しにも何かに怯えているのがまるわかりで、キョロキョロと辺りを見回していた。

「ここにいるってことは、冷やかしや嫌がらせメールじゃないってことでいいんですよね？」

そんな彼女へやや遠慮がちにケンジが尋ねた。相手はしばらく黙ってから、はい。と頷く。

だとしても、あのメールはちょっと異常かな。と湊は思考するが。

「……私の所に、来たんです」

「来たって？」

「……ジョーカー様が、来たんです」

「なっ……」

「そんな、あれはただの噂じゃ……」

「でも、来たんです！」

「……あの、ジョーカー様って？」

「先輩、知らないんですか？」

コクリと頷く。湊はＯＺを人との連絡手段やチャットに使うのが主で、それ以外にはあまり使わないし、掲示板なども滅多に覗こうとしないので、ＯＺ内の噂などには疎かったりする。
ＯＭＣに関しては、佳主馬と連絡をとったりしているので応援に行ったりしているのでその限りではないが。

「ジョーカー様って、最近ＯＺの掲示板で有名な噂なんですけど……」

「メール形式で届いて、これが来た人はその日の日付が変わるまでに願いを書いて返信しなくてはならないんです。返信すればいつか願いが叶うけど、それをしないで日付が変わると、ジョーカー様に心を持って行かれて無気力な人間になってしまうっていう都市伝説みたいな噂ですよ。この間あった変死体の殺人事件とかも手口が理解不能だから誰かがジョーカー様がやったんじゃないかとかって話もあるんですよ」

「そうなんだ。……無気力な人間、か」

「で、たぶんこのリコさんは返信しなかった。ですよね？」

「はい。したら、こんなメールが来たんです」

コピーして持って来たのだろう。目の前にモニターが現れ、文字が浮き上がる。
差出人はＪＯＫＥＲと書かれたメール。件のジョーカー様からだろう。三人はそれを読み始めた。

【リコさん、あなたは私に願わなかった。そんな願いのない人はこの世を生きる意味がない。よって、あなたを捧げ物にさせてもらいます。
残り、四日】

「それから毎日メールが来て、残り、何日ってカウントダウンみたいに迫って来るんです。それと、これ……」

残り日数のみを告げるメールと、その日にちごとに徐々に迫ってくる道化師の写る写真。
雰囲気的に気弱そうな相手は、結構本気で参っているのだろう。声からはだいぶやつれているように感じる。

「なるほど……とりあえず、ＯＺに連絡しておきます。何かあったら俺にすぐ知らせてもらえますか？」

健二や佐久間もその異常性に気づいたのだろう。真剣な顔で相手に

対応していた。

「……」

その様子を眺めながら、アバター越しに噂の内容を反芻する。
願いを叶える代わりに、願わない人間を無気力にする。どうしても無気力、という単語に引っ掛かりを覚えてしまい、最近の出来事を思い出してしまう。

一一シャドウと化してディスプレイから現れたラブマシーンも、これに関係してるってこと？

あれからも相変わらず影時間は訪れない。が、湊はこの時間帯……つまり、今ここでもペルソナを喚ぶことができる。現在装備しているタナトスのおかげで身体能力は更に向上しているし、闇系統のスキルは反射する。おそらく、現実的な黒魔術すら返せるだろう。

「……シャドウは、消えてない」

断言できるほどの材料もなく、まだ推測の域を出ないが、湊は言い切った。
それが自らがこうして生きていること、そして未だ存在するペルソナ能力の意味なのだろうと、そう感じた。
その為だけに生かされた、そう思うと、湊は少し自分の胸が痛くなるような感覚に襲われていた。

一一一一一一一一一一一一

「……良かった」

少女は、ホッと一息をついてベッドに横になった。
あの二人は夏の事件の功労者でもあり、後ろにいた犬のアバターも見覚えがある。きっと迅速に対応してくれるだろう。
そう思うとあのメールはやはりイタズラメールなのではないかとすら思えてくる。

「うん？」

そんな彼女のパソコンに、一通のメールが訪れた。
犬のアバターを向かわせると、そこには見たことのない、道化師のアバターが。

「……え？」

少女は、体温が下がった感覚に襲われていた。全身から嫌な汗が止まらず、鳥肌がたっている。

「そ、そんな……」

そのアバターからのメールを受け取らずに無視しようとしたら、道化師は小躍りを始めて、笑い出した。
ヒヒヒ、ヒヒヒと老人のような少し嗄れた声を裏返した、聞く者を不快に、あるいは恐怖に突き落とすような声で。

「い、嫌！　いやぁっ！」

逃げる。部屋から出ようと振り返る。外に出て、それからさっきの人に連絡しよう。
頭のどこか冷静な部分がそう告げて、彼女はそのまま部屋のドアに手をかける。そして、そのドアを開いて一一

「……え？」

そこは、真っ白な部屋だった。まるで、ＯＺのような、何もない白い部屋。見覚えのある、真っ白な部屋。

「な、なに……これ」

「ヒヒヒ」

「ひっ！？」

後ろから聞こえた声で、唐突に彼女は理解してしまった。ここは、先ほどまで彼女のアバターがいたフロアと同じなのだ。

「な、んで……なんでっ！？　私は自分の部屋にいたはずなのにっ！」

「逃げられないよ」

次に聞こえたのは、不気味な笑い声とはかけ離れた低い声。ワイドショーなどで男性の音声にかけられるようなモザイクがかかった、低い低い声。

「逃がさないよ」

少女は、振り向いてしまった。そして、見てしまった。
自分を見つめる道化師と、

「っ……」

巨大な牙を持つ仮面をつけた化物を。

「いやっ……」

「願いがない人間は、この世にはいらないんだ。だから、僕にその魂を贄として捧げてよ」

「いやっ！　来ないで！　来ないでぇ！」

腰が抜けてしまったのだろう。少女は尻餅をついてしまい、化物はその少女へと巨大な口を開けて近づいた。

「来ないで！　来な……いやぁぁぁぁぁぁっ！！」

断末魔の叫びにも似たソレが、白い部屋の中に木霊したのだった。

プロローグ（後書き）

ちょっとアトラスチックな感じでプロローグを仕立ててみました。

こっちの作品ではペルソナ3のキャラも準レギュラーまたはレギュラー並の扱いで出したい……なぁ。とにかく出ます。さすがに湊クンだけじゃもたないですし。

設定的なモノの中にペルソナ2や異聞録が加わったりするので、それをやったりするとよりニヤニヤできるかもしれません。

プレステのソフトなんでお安いですよ↑

と、軽い宣伝もしたことですし、改めてまたよろしくお願いします。

では、次回の後書きで会いましょうっ！

第一話"無気力症"

パシン、パシンと竹刀の音が響く中、湊は目を瞑ってその音に身を委ねていた。
自分もやっていたことだからだろうか、その表情はどこか嬉しそうで、しばらくしてからその目をゆっくりと開いた。

「止め！　整列！」

『はいっ！』

現在の主将であるだろう少女が声をかけて部員達を集めていた。夏希は先生側にいるようで、チラリと湊を見てウインクをしていた。

「今日は篠原先輩もいらっしゃってるのだから、いつも以上に取り組むように！」

『はいっ！』

ちらほらと剣道部の練習は覗かれているようで、自分以外にも見学者は数人いた。
女子の隣では男子が同じようなことで気合いを入れていた。

「こんにちはーっ！」

そこへ違う学ランを着た生徒達が大勢入って来て、騒がしかった剣道場が一層騒がしくなる。
どうやら合同で練習を行うらしい。湊はその学ランや制服に見覚えがあった。

一一あれ、早瀬のとこの……

そう言えば夏希が合同練習をよくしているって言ってたな。と思い出し、改めて彼らを見つめる。
今年の夏では団体でも全国優勝を果たしたらしく、早瀬も最後の大会は個人、団体共に全国大会を制覇したようだった。自分はそれどころではなかったせいで、聞いたのは二学期が始まってからだが。

「あ、いたいた。湊くん！」

「……夏希？」

先ほどまで指導していたはずの夏希が湊の方へと駆けて行く。
そしてその後ろには、見覚えのあるジャージ姿の男子が一人。

「久しぶりだな、有里」

「……そうだね。久しぶり、早瀬」

かつて駅前で友情を育んだ友人の一人であり、剣道という武道の中でだが、湊に勝ち越しをしている唯一の人間。早瀬が湊へ小さく笑っていた。

「全国優勝したんだって？　　おめでとう」

「ああ。だが、団体の地区予選決勝では宮本に負けたよ。個人で雪辱を晴らしたけどな」

「そっか。ミヤも、頑張ったんだね」

「当たり前だ。やつのやる気は俺をも凌ぐやもしれん。膝の調子も良いようだ」

「なら良かったよ。知らないところで怪我でもされてたら困る」

自然と口調が明るくなってしまう。かつて住んでいたところの友人に再会すればそうなってしまうだろう。
湊は、”自分がどうなったか”を特に考えることもなく話を続けた。

「しかし……宮本から聞いてはいたがまさか久遠寺にいたとはな」

「？　　ミヤから聞いたって、何を？」

「お前の転校だよ。突然過ぎて挨拶もできなかったと嘆いていたぞ。俺も自分と互角にまでなったお前がいなくなって、今年の地区予選はつまらなくなるかとも思ってたんだが……宮本がその分を補ってくれたようだな」

楽しそうに話す早瀬だが、聞く側の湊は先ほどと真逆の反応だった。正しくは、思考の海に引き摺り込まれてあまり反応できないだけなのだが。

一一僕が、”転校”？

間違いなく、自分は卒業式の日に死んだと自覚している。こうしてどうしてか生きているが、死んでいる。なのに、”転校”。

「……美鶴先輩辺りが気を利かせてくれたのかな」

やや内気であまり自分から話さない湊ではあるが、月光館学園では親しくする人は多かった。少なくともここのクラスメイトよりはあちらのクラスメイトの方が友人は多かった。
その友人達への配慮なのかもしれない。何も知らない彼らに「魂を

以て死の概念を人々の死を望む意識から封印しました」なんて言えるわけもなければ、不慮の事故で殺すわけにもいかないだろう。そう自分を納得させたところで、早瀬が苦笑していた。

「宮本が連絡つかないと嘆いていたぞ」

「……ああ、うん。携帯が壊れて新しく買い直したから」

「なるほどな。俺のもか？」

「うん」

そうか。と早瀬は頷いて携帯をポケットから取り出した。改めて連絡先を、とのことのようだ。
湊も携帯を出して連絡先を交換することにする。

「なんて言うか、ホントに二人って友達だったんだ」

湊が自分の連絡先を送ったところで二人のやり取りを眺めていた夏希から声がかかった。どこかつまらなそうな顔をしてるのは湊の気のせい……ではないようだ。早瀬も夏希の表情に困惑している。

「有里から聞いた、とさっき言っていなかったか？」

「聞いてたけど、なんか湊くんが学生っぽくてびっくり」

「はは、なんだそれ」

「あの、僕は学生なんだけど」

夏希の言葉に早瀬は笑い、湊は困ったように後ろ髪を掻いた。
案の定夏希の言いたいことが伝わらなかったようで、むー、と内心で唸って夏希はまた唇を尖らせた。

一一早瀬くんがわからないってことは、これが湊くんの素なのかな。

二学期が始まって、彼は夏希に言ったように周りと打ち解けようと努力を始めた。
成果としては二週間でクラスの男子は彼と仲良くしている姿をちらほらと見かけるようになっているほどだった。一部は湊経由で夏希に近づこうとする者もいたりするのだが、それは湊も夏希も気づいていないので割愛する。
そんなこんなで彼も慣れてきたのか、夏希に対してもクラスメイトに対してもよく笑顔などを見せるようになっていた。
しかし、やはりどこか一線を引くような感覚が無いことも否めない。
その理由かもしれないモノに、思い当たりがあるから尚更にだった。

「俺としては篠原と有里が知り合いなことにびっくりだよ」

「同じクラスだから」

「あ、そういうことか」

あの夏の事件、ディスプレイから出たラブマシーンに見せたあの異形のモノ。
片方は天使のようで、片方は悪魔のよう。普通ならあり得ないラブマシーンの出現に対し、湊はそれらを自分から出してラブマシーンを倒した。つまり、あの時のラブマシーンが何かを知っており、関連を持っているということになる。

「それで、今日はどう言った理由でここにいるんだ？」

「夏希に呼ばれて。たぶん、早瀬が来たからじゃないかな」

二人の会話を他所に、夏希は湊を見つめていた。
湊はあの悪魔に対して「おかえり」と言ったのだ。それは、やはり何かがあるからだろう。とは言っても彼は自分達の恩人であり、今さら湊をないがしろにするという選択肢はない。むしろ、やはり親しくしたいと思うのが夏希の心情だ。だから、それ故に彼の一線を引く笑顔が気になった。あの悪魔達がその原因と思っていたから。
けれど、それは簡単に打ち消された。

「しかし、あの篠原が男子を誘うか。確かに有里ならあり得るかもしれないが」

「それ、どういうこと？」

「……お前、何も知らないのか？」

どこか浮世離れした雰囲気を持っているはずの湊は、こうして現代を生きる高校生そのもので旧友と話している。
表情こそ変わらないが、自分やクラスメイトにはない気安さがある。
思えば、健二や佐久間に対してもこんな感じだ。
それが、なんとなく嫌だった。いわゆる嫉妬だったりするのだが、それに気づかない夏希は二人のやり取りを見て、「そう言えば湊くんのこと全然知らないなぁ」なんて少し落ち込んでしまう。

「……へぇ、そうなんだ」

「ああ。まぁ、有里はどこか人を惹き付ける魅力があるからな。別に篠原が仲良くしていたとしても特に不思議はないが」

「それは買い被りだよ」

「？　何のこと？」

「いや、俺でも知ってることをいくつか話していただけだ。と、そろそろ後輩の練習も見ないとな」

「そうだね。久々に会えて良かったよ、早瀬」

「ああ。そうだ、俺はもう進路が決まってるから、ちょくちょく合同練習には顔を出すと思う。良かったらまた見に来てやってくれないか？」

できればお前も。と誘う早瀬に苦笑して、けれど頷く湊。
古い友人に会えたのは嬉しく、この時の彼は心にあった少しのモヤモヤをひとまず晴らしていた。

一一一一一一一一一一一一一一

「礼」

『っしたぁっ！』

練習が終わり、剣道場が先ほどとは違う、現代の人間の騒がしさに包まれる。やれ昼食やらやれゲーセンやら、これからの計画を立てているらしい。

「……はぁ」

「田村、辛いのはわかるがあまり気落ちをするなよ？　見舞いには俺も付き合ってやるから」

「はい。……ありがとうございます、早瀬先輩」

自分は夏希が迎えに来るまで暇なので、後輩や他校の生徒と談話する夏希を確認すると、ひとまず早瀬と話そうと彼の元へ向かっていた。
が、そこには既に先客がいる。どうやら彼の後輩らしいが、非常に気落ちをしてしまっている。

「……どうかした？」

「ああ……有里、お前ＯＺはやってるか？」

「え？　まぁ、一応」

「なら、”ジョーカー様”は聞いたことがあるだろう？」

「……うん」

なんだか雲行きが怪しいな、と思いながら湊は頷いた。
過去に培ったカンでいけば、これは十中八九悪い話だ。

「こいつ、俺の後輩の田村って言うんだけどな、こいつの妹がアレの被害に遭ったって言うんだ。例の無気力症。アレにな」

「！！」

無気力症。嫌な予感がカタチになって現れていく。
その言葉がまるで鋭い刃物にでもなったかのように湊へ突き刺さろうとする。

「それって、まさか……犬のアバターだったりしない？」

「知ってるんですか！？」

その反応が、湊に刃物を突き刺したと言ってもいいだろう。ＯＺ内に流れる噂を、湊は現実として認識してしまった。

「リコさんって、名前だね？」

「はい！」

「有里、知り合いなのか？」

「ううん。後輩がＯＺのアルバイトをしているから、そういう仕事も受けていたりするみたい。それで先日、メールを受けてその後輩がリコさんと会った場所に立ち会ったんだよ」

「なるほど……して？」

「僕はその時に初めて”ジョーカー様”を聞いたし、後輩も詳しくは知らなかったみたい。まさか……また無気力症が……」

「あの、先輩達はどうしたんですか？」

「件のメールをＯＺに連絡したよ。どう対応していいかわからなか

ったみたいだし」

シャドウ化して現れたラブマシーンが嫌でも脳裏に再生される。知れず、ポケットに突っ込んだままの手を強く握りしめた。

「そう……ですよね」

「……もし良かったら、その時のことを教えてもらえるかな」

「はい……母が言ってたんですけど、いきなり妹の叫び声が聞こえて、慌てて行ったら呆けて床に座った妹がいたらしくて」

「ありがとう、それとごめん」

辛かったのだろう。俯く男子生徒に謝ってから、湊は思考の海に入った。

一一叫び声が聞こえて……と言うことは、やっぱりシャドウが？

あんなことがあったとしても、やはりどこかでシャドウを否定してしまう。

湊は目の前で滅びを回避し、影時間が消えたのを体感したはずだった。残りの時間もみんなが忘れている中、一人平和の世を動かなくなる身体と共に歩いた。だからこそ余計にシャドウを否定してしま

う。したくなってしまう。

「有里、そんなわけだからもう行くな。後で宮本にも教えていいか？」

「……あ、うん。またね、早瀬」

「おう」

剣道場を出る友人に手を振り、改めて湊は思考の海に沈む。
それから何度もシャドウの可能性を考えてはそれを打ち消そうとする悪循環が、夏希に肩を叩かれるまで続いたのだった。

一一一一一一一一一一一一一

「まったくもって理解できないよ。侘助、これはキミにも無理なのか？」

「当たり前だ。メールを返さないと無気力にしちまうって、どんなシステムだよ」

シシシ。と笑わない辺り、侘助も本気でわからないのだと理一は理

解した。
ひねくれてはいるが、侘助の持つ技術は世界でもトップクラスなのだ。それは既に夏に実証されている。だが、その彼がわからないと言っているのだ、今回の相手は非常に手強いと言っていいだろう。

「しかし、願いを叶える……ねぇ。まるで切札（ジョーカー）だ。ポーカーなんかで来ると正に願いを叶えてくれるからな」

「バカなことを言わないでくれよ。とにかく、何かわかったことがあったら連絡してくれ。こちらも、猫の手も借りたいほどだからね」

「シシシ、わかったわかった。まぁ、こんな得体の知れねぇもん出されたら気にはなるしな」

そう言って侘助のアバターが目の前からログアウトする。それを見届けてから、理一はネットを開いた。
あの夏の事件から、陣内家の面々は侘助と連絡を取るくらいには関係が改善されていた。だから理一もこうして彼に連絡し、協力を頼んでいる。

「謎の無気力症に”ジョーカー様”。一体なんだって言うんだ」

無気力症は一年前に騒がれたが、”ジョーカー様”は初めてだ。OZ内の出来事が現実に干渉するなど、本来ならばあり得るはずがな

い。

「……いや、待て」

あり得るはずがない。ないが、理一の脳裏に”彼”の姿がよぎる。あの夏にあったちっぽけで壮大な戦争と、その最後にあった理解できない出来事。そして、それを潰した少年の姿。

「確か、去年の無気力症騒ぎも月光館学園付近が多かったはず」

電子世界から現実へ、肉体で訪れる干渉は少ない。視力が落ちるや、頭痛、肩凝りなどならばともかく、ディスプレイから何か出るなど普通はあり得ない。あり得ないはずなのに、あり得てしまった。

「……了平が読んでた漫画にも書いてあったね、あり得ないなんてあり得ないって」

あの栄が認めて夏希が惚れた男だ。理一は自分達の一族の人を見る目は素晴らしいモノだと思っている。だから、”彼”に対して疑念は沸かない。むしろ恩人でもあるし、いざとなると力を発揮する様子には好感が持てる。持てるが、理一の知る中で非現実が関わるのは彼しかいない。ラブマシーンを倒せるほどの強さを持つ異形を持つ彼にしか。

「湊くん、もしかして、キミは何か知っているのかい？」

理一の呟きは、パソコンのディスプレイに呑まれていった。

第一話"無気力症"（後書き）

早瀬出したら予想以上に長くなって夏希先輩と湊クンのランチイベントは次回に持ち越しに……

ああごめんなさい夏希先輩！
次回はこんな空気じゃなくて出番ありまくりだから許してっ！

理一さんのあり得ない一一のくだりはやりたかっただけです。
反省はしていません（おい

二次創作では出番の多い理一さんですが、こちらでももちろん。
ちょっと言えないトコって、便利な言葉ですよね↑

さてさて、次回は夏希先輩と湊クンのランチイベント。そしていろいろ動き出し始める予定です。
……ランチイベントだけで埋まらないように気をつけます。

ではでは、次回の後書きで会いましょう！

第二話"距離"

「……」

まだ暑さの残る道を歩く中、夏希は何度も隣を歩く湊へ視線を向けた。

けれど、湊の視線は一行に前を向いたきり動かない。否、前すら見ていない。

一一また、考え事かな。

剣道場を出た時から彼の様子はこのままである。夏希の経験上、湊は何かしら考え始めるとこうやってその思考に沈み込んでしまい、しかも引っ張りあげるのは容易ではないのでなかなか骨の折れる事態だったりする。もっとも、今回は夏希の事情も違うのでやる気満々だったりするのだが。

「また考え事？」

「え？　　あ、いや……」

「ふふ、湊くんって考えを隠すのは上手でも、嘘をつくのは苦手みたいだね」

「……そう、かな」

咄嗟に思考の海から引きあげられた時の湊は、普段から考えられないほどに無防備な姿となる。ポーカーフェイスもそこまではカバーしきれなかったらしく、湊は困ったような顔をした。

「何かあったの？」

本人に自覚はないが、その言葉にはどこか強制力があった。栄のような者の持つそれとは少し違うが、同じベクトルのモノ。相手を思いやる強制力。それをなんとなく感じたのかもしれない。湊は笑って、

「着いたら話すよ」

目の前に見えてきたファミレスを指差したのだった。

一一一一一一一一一一一一一

「”ジョーカー様”？」

「そう」

ファミレスに着いて、湊が話し出した内容は夏希もクラスメイトから聞いたことのあることだった。

「小磯や佐久間が会ったのが早瀬の後輩の妹らしくて、その人……今無気力症で入院してるらしいんだ」

「え、でもただの噂じゃ……」

「うん。そのはずなんだけど……こうして直面しちゃったから」

「そっか、そうだよね。けど、不可解だよね」

「……うん」

そんな、電子と現実を合わせたようなことは一般常識では考えられない。
ましてや、人為的に無気力症に陥れるなんていうその手段が理解できない。

「湊くんは、さっきからその人のことで考えてるの？」

「えっと……」

「だけじゃないんだね」

言葉が見つからずに悩む湊に、夏希は思わず笑ってしまった。
以前だったら気にしないで、と言われたりしたかもしれないが、最近の湊は夏希にその言葉が通じないとわかってるので、普段のような対処ができないでいるのだ。それは、暗に湊が夏希に対してだいぶ心を開いていたりすることを意味するのだが……二人ともよくわかってなかったりする。

「思い当たることがあるとか？」

湊は夏希の言葉には答えずに、ドリンクバーで持ってきたコーヒーをストローで口に含んだ。
それを肯定と取ったのか、夏希は再度同じ質問をする。

「ある。って言えばあるよ」

「なら、それを当たればいいんじゃない？
私で良ければ手伝うよ？」

小さく言う湊に、夏希は特に何か考えるわけでもなく答えた。
そういう点において彼女はとても潔い。わからないならわかるようにすればいい。と至って単純明快な答えを導き出す。それは間違いなく美点で、篠原夏希が人気者である理由の一つと言えた。

「いや、当たるなら僕に”ジョーカー様”が来ないとだから」

「……え？」

そんな夏希の勢いに押されてしまったからだろう。湊は思わず答え返していた。
言ってから、まずそうな顔をしている。

「湊くん、何か叶えたい願いがあるの？」

「違うから」

「え、じゃあどうして？」

見当違いな言葉に脱力してしまうが、どうして？　と聞かれれば湊は答えに詰まってしまう。シャドウが絡んでいるかもしれない。

なんて言ったところで夏希は影時間もシャドウも知らないのだから、説明しようがない。

「えっと……あ、そうだ」

湊は、自分の抱える”異常”を話すことに何も疑問を抱いてはいない。その辺のことに無頓着だからなのもあるが、それから派生する他人の自分への評価を気にしていないからだった。
この性格を多少なりともどうにかしたいと思っているからか、普段から話そうとはしないし（そもそも話しても精神の異常を疑われるだけだが）、彼風に言えばこの手の面倒は全て「……どうでもいい」で片付けられるからである。
夏希は彼の一線を引く理由をそこにあると踏んでいると思っていた。だから、次の彼の言葉に大いに驚くことになる。

「ラブマシーン、覚えてる？　ＯＺを徘徊していた方じゃなくて、パソコンから出て来た方」

「え？　あ、うん」

「あれを、僕は”普通ではない方法で倒した”よね？」

夏希の顔が驚き一色に染まる。それを湊は夏希が自分の言うことを理解したのだと取って、夏希は全然違う理由で驚いていた。

聞きたいことの一つ、と言うか湊にとって秘密にしておきたそうなことをこんなにあっさり言うと思わなかったのだ。

「ち、ちょっと湊くん。そ、そんなにあっさり言っちゃっていいの？」

「？　だって、夏希には見られてるし」

「そ、そうだけど……」

その場にいなかった健二や佐久間が相手だったら違う言い方をしただろうが、夏希は湊のペルソナを見ている。だから隠す必要も包む言い方をする必要もないと、湊はストレートに言ったのである。

「話を戻すけど、ラブマシーンがパソコンから出て来るなんて普通じゃ考えられないから。だから、もしかするとって思って」

「湊くんは、あのラブマシーンが何かを知ってるの？」

夏希の問いに、湊は頷いた。元々湊には仲間のような強い意思を持っていない。世界を滅びの確約から防ぎたいとは思っていたが、自分の家族は死に、常に独りだった彼には守るモノがなかった。だから、仲間や友達を、そしてその守りたいモノを守ろうと決めた。

死神を……デスを身体に内包していた責任を取る。という意味合いも含んではいたのだが、湊は仲間の為に仲間と共に戦った。ペルソナチェンジという、仲間全員とも一対一なら互角以上に戦えるような能力を持ちながら、だ。
気取る、と言うことをしないからなのかもしれないが、彼は自分にできないことは素直に認める。リーダーであったとしても、世界を救おうとしても、それだけは変えなかった。自らをイゴールと呼んだ長鼻の老人にも言われた”絆の力”を大切にした。だからこそ、確約された滅びを防げたのだと思っている。それが、自分の死と引き替えだったとしても。

「あれは、”シャドウ”って呼ばれてた」

だから、湊は話す。自分一人でできることなどたかが知れているから、と。
巻き込みたくないなら、巻き込まないようにすればいいと。自分はなんでもできる正義の味方ではないからと。もちろん、話す相手は選ぶが、その点において篠原夏希という少女は湊にとって充分信頼できる人間だった。
それに、あの時の夏希に惹かれたからと言うのもある。
自分が頼りにしたのは、いろんな人との間に生まれるコミュ……絆の力だ。その人達とは確かな絆があったが、使うのはそれによる副産物。だが、夏希はあの時、世界中の人々から力を借りて、力を合わせた。
あの大きな繋がりにひどく惹かれ、その中心にいた夏希に、憧れの情すら抱いた。
だから、自分も力を借りることを考える。あれほどの大きな繋がりはなくても、また何かあった時に胸を張って立ち向かえるように。

「シャドウ？　影？」

「うん。詳しく話すと長いから省くけど、僕は”ペルソナ”を使ってアレを倒すことができるんだ」

「ぺるそな？　ご、ごめん湊くん。いきなりの説明過ぎてちょっと頭が追いつかないかも」

「あ、うん。えっと……ペルソナって言うのは”自分の中にいるもう一人の自分”。
写し身とかって言われてるアレのこと。僕はそれをシャドウへの対抗手段として召喚ができる。だから、ラブマシーンも倒すことができた。ここまではいい？」

「う、うん」

夏希はとんでもない話だ、とは思った。同時に、あの時の湊の勇姿を思い出し、それが嘘ではないと信じることにする。
篠原夏希は、その恋愛感覚は今どき珍しい（古いとも言える）純愛などをよく信じる女の子だ。親類曰く”大正時代”。そんな夏希が幼き初恋以来好きになった相手なのだ、滅多なことでもない限り湊を疑うことはないだろう。
両親はそんな夏希を見て、好きになった相手が湊のような子で良か

ったと安堵したと言う。それくらいに一途なのだ。
こっそり花占いをしていたりする辺り、昔からあまり進歩は見られていないのかもしれないが。

「あ、来たみたいだよ」

「ホントだ。それで、続きは？」

頼んでいたものが来て、夏希の目の前に置かれる。
しかし、それを食べようとはせずに夏希は湊に話を促した。

「いや、とりあえず食べない？」

「まだ湊くんのが来てないよ」

「僕のはいいから。冷める前に食べちゃった方がいいって」

「いいの。ご飯は一緒に食べないと美味しくないんだから」

さすがは陣内家。ニコニコ笑顔でそんなことを言われてしまえば湊に返す言葉はあるはずもなく、渋々続きを話そうとコーヒーを飲んだ。

「本当は、シャドウはもういないはずなんだけど……何故かラブマシーンはシャドウになって出てきた。だから、もしかすると”ジョーカー様”は一一一一」

「シャドウかもしれない？」

「うん。シャドウに襲われた人は、無気力症になるから……」

「だからジョーカー様が湊くんに来れば、って言ってたんだね」

夏希の言葉に湊は頷いた。ちょうどいいタイミングで料理が運ばれて来て、二人は昼ご飯を食べ始める。

「そういえば、湊くんからそういうことを話してくれたのは初めてだね」

「そう？」

「うん。湊くんを相手にしてると、思わずいろいろ話しちゃって」

それは夏希だけではなく、他のクラスメイトにも言えることだった。とりあえずみんなと馴染もうと努力している湊は、話の和に加わっても相変わらず話し下手で聞き上手なせいか、やはり聞き手に回ることが多い。しかし人の話をちゃんと聞いて、答えてくれるからかみんなついつい話し過ぎてしまうようだ。あっという間にクラスの相談係のような立場に収まった時は、どうしようかと本気で健二と佐久間に相談したほどだ。

「他には何かないの？　湊くんの趣味とか特技とか」

「趣味？　趣味は音楽聴いたり、本を読んだりくらい。あ、料理も一応。特技は……なんだろ」

宙を見つめてパスタを食べながら思考する湊。本当に悩んでいるらしい。

そんな姿に微笑んで、夏希も自分のドリアを口へ入れた。

「たぶん、夏希が思ってるほど変わってはいないと思う」

「べ、別にそんな、変わってるなんて思ってないよ？」

「そう？」

実はちょっと思ってたりするが、本人にそう言われては否定するの

が常。首を傾げる湊に笑って、夏希は誤魔化すようにミルクティーを飲んだのだった。

一一一一一一一一一一一一

「結構長居しちゃったね」

「うん。でもほら、店員に追い出されるよりは早く出たから」

帰り道を自転車を転がしながら歩く湊と夏希。二人とも自転車だから乗ればいいのにどちらも転がして歩いていた。

「けど、聞けば聞くほど万能超人だね、湊くんて。剣道部に吹奏楽部に生徒会を掛け持ちしてて、しかもそれであの頭の良さでしょ？」

そんなことないよ。と湊は苦笑した。あれから夏希に質問攻めにあって、月光館で何をしていたか、などを話していた。
湊のことを知れたからか、夏希は機嫌がだいぶ良かったりする。

「進路先はやっぱり大学？」

「になるのかな。実はまだ良く考えてないから」

内心現在のことに精一杯だったりする湊としては、まだ進路などに力を入れる余裕がなかったりする。推薦でも行けるくらいの学力はあるので、もう少ししても大丈夫だろうと言うのが彼の考えだ。夏希としては、可能な限り湊と同じ大学がいいなぁなんて思ってたりするから知りたくて仕方ないのだが。
恋する女の子（はいからさん仕様）とは恐ろしいまでに一途なのである。

「じゃあ、一緒の大学に行こう」

とは言いたくても言えない辺り、そこもしっかり恋する女の子だったりするのだが。

「この後はどうする？」

「え？」

「いや、まだ早いから……どこか寄るのかと思って」

「あ、う、うん！　そういえばジュネスが新しくできたんだよね！　試しに寄ってみない？」

「わかった」

にっこり笑って、夏希は少し早めに自転車を転がした。慌てて湊は夏希の隣に並んで遅れないようにして歩く。

さりげなく、夏希は湊への距離を詰めてより近くを歩いていたのだが、それに湊が気づくわけもなく、けれど夏希の表情は笑顔に染まっていた。

第二話"距離"（後書き）

……あれ？　ランチイベントで終わってる気がする。

むむ、少女漫画っぽい恋愛描写が上手くできずに悩み悩み書いてたらこんなことになってしまった……

とりあえず、恋愛描写って、凄い書くの難しいんですね。
私自身が恋愛経験豊富！　とかならまた話は違うんでしょうけど、そうでもない上に夏希先輩って大正時代な恋愛感覚だからどうなんだろうってなっちゃって。湊クンは自分から率先して恋愛するタイプとかじゃないし……ゲームなんかじゃ間違いなくコミュ目当てでやってるようにしか見えなかったり↑

まぁ、こちらも本編の主要な話の一つですから頑張ります。

さて、次回はまたアトラスチックな雰囲気に戻……るかわからないけど、進展させるつもりです。
戦闘はまだ先にするつもりだけど、展開によってはあるかもです。

では、次回の後書きで会いましょうっ！

第三話"日常"

「明彦、やはり……」

「ああ。調べに調べた結果だ。間違いないだろう、やつは生きている」

高級そうなバーの隅で、桐条美鶴は小さくため息を吐いた。向かい側に座る白い短髪の男が持って来た資料には、夏にあったラブマシーン事件のことが細かく書かれている。

「久遠寺高校の三年生に、有里湊と書かれた男子がいる。もちろん、月光館からの転校生でな」

「……何が起きていると言うんだ、一体。あの日のあの場所で、私達は彼を見た。死の概念であるニュクスを人々の死を望む意識から守る為に、あそこで一人佇む彼の姿を！」

「それは俺達だってそうだ。だが湊はこうしてここに存在する。気になるなら、会っちまった方がいい」

「しかし……」

「ああ。お前は忙しいし、順平達は受験生だ。出来る限り負担はかけたくない。
なら、誰が行くかは決まったも同然じゃないか」

「いいのか？」

「悪いがメンタル面においてはお前達より強いんでな。もし湊が生きてるなら、気にならないわけがない。少しは怖いが、前に行くしかないだろう。安心しろ、ちゃんと結果報告はしてやる」

「……すまないな」

「構わん。岳羽や順平に言えば気が気でなくなるだろうし、お前も予想以上に参ってるからな。むしろ、こうして俺が平然としてられることが意外なくらいだ」

「……そうだな。キミは強いよ、明彦」

「当たり前だ」

ニヤリと笑ってジャケットを右手に持ち、それを背中に回して男一一真田明彦は立ち上がった。

「試合が終わってからだから、会いに行くのは来月の頭くらいになりそうだな。
それまでに何もないと良いが」

「何も、とは？」

「聞いたことくらいはあるだろう。ＯＺに出回っている噂だ」

「すまない、ＯＺにはあまり出入りしないんだ。桐条のコミュニティくらいしか活用する場が無くてな。だからそう言われても咄嗟には出て来ないんだ」

「そうか。なに、”ジョーカー様”って言う奇妙な道化師から送られるメールに願いを返信すればいつかは叶い、返信をしないものは”ジョーカー様”に魂を奪われる。
不可解な無気力症に陥って入院する患者が増えてるそうだ。同じサークルの仲間も一人、入院してる」

「！　まさか！」

「シャドウの可能性は本来あり得ないんだがな。湊には悪いが、どうにも嫌なことがありそうだ」

「そう、だな。それは私の方でも調べてみよう。できればゆかり達には知らせたくはないが……」

「湊のことは本人とわかったら、これはもっと深く判明したらでいいだろう。あいつらは将来を決める瀬戸際だからな、できれば有意義に、後悔も未練も残して欲しくない」

「ふ、それに関しては平気だろう。なんせ私達の仲間で後輩だからな」

「それもそうか。じゃ、俺は行くぞ」

「ああ、助かったよ」

背中越しに左手をあげて、明彦はバーを出て行く。
美鶴はそれを見送って、小さく笑ったのだった。

一一一一一一一一一一一一一一一

「ゆかりさん」

「アイギス？　どうしたの？」

「いえ、隣のクラスの方から帰りにカラオケはどうかと誘われたので、ゆかりさんもと思って」

場所は変わって、私立月光館学園の教室でピンクのセーターを着た少女一一岳羽ゆかりは話しかけてきた金髪の少女一一アイギスに振り返った。
カラオケの誘いだが、拒否する理由もないので一緒に行くことにする。

「いいね。たまには羽伸ばしたいし」

「では、」

「うん。私も行くよ」

ゆかりの言葉にアイギスは嬉しそうに笑った。その笑顔を見て、ゆかりはアイギスが変わったのだと改めて思う。
これでもアイギスはロボットなのだが、そんなのは微塵も感じられないほど、綺麗な笑顔だった。

「お、ゆかりッチにアイちゃんはカラオケかぁ。んじゃ、俺ッチはどうするかなぁ」

「彼女のとこにでも行ったら？」

「なっ、べ、別にチドリはまだ彼女とかそういうんじゃ……」

「”まだ”、でありますか？」

「ア、アイギス！　そういう時ばっか昔の口調で言うな！　ってか笑うな！」

キャップをかぶった少年一一伊織順平は軽く話しかけたつもりだったのに、予想外の弄られ様に必死で弁明してからため息を吐いた。去年知り合っていろいろあった少女とは進展してるような、そうでもないような関係がまだ続いているようだ。彼が案外奥手なことにゆかりは大層驚いたようだが。

「ったく、最近のアイギスはゆかりッチに似てきたなぁ」

「当たり前です。だって、ゆかりさんは私の尊敬する親友ですから」

「あはは、嬉しいこと言ってくれるじゃないの」

「事実です」

自然な流れで会話をして、笑顔になる二人に順平は微笑んだ。それはどこか安堵したような笑みで、

「ま、それならそれでいいんだけどさ。んじゃ、これ以上何か言われる前に退散しとくかな。じゃな、ゆかりッチ、アイギス」

「ん、またね」

「順平さん、また明日」

先に順平が教室を出て行き、直後に迎えが来たのかゆかりとアイギスも教室を出て行く。
今日も、月光館学園は平和だった。

一一一一一一一一一一一一一

「はい、お待たせ」

「うぉ、美味そうっスねぇ」

「ありがとうございます、湊先輩」

「いえいえ」

湊の部屋にて、健二と佐久間の目の前に置かれたのは一つの鍋だった。九月も下旬になってきて、気温もだいぶ下がって来ている。今日は冬を先取りしたような寒さで、「寒いですねー」なんて健二が言ったのがこの鍋……すき焼きの始まりだった。

「あ、あの……ホントにいいの？」

「うんうん。ウチまでお世話になっちゃってるけど、マジでいいの？」

そんな二人の声に、制服にエプロン装備の湊は頷いた。
そのうちの一人一一夏希は初めて来た湊の家に気が気じゃない。凄まじい慌て様である。佐久間や、健二にすらわかるほどに。

「しっかし、一人暮らしでこんなアパートとは有里くんも豪勢だねぇ」

「そんなことないよ」

もう一人の少女一一霧島枝里子（きりしま　えりこ）はしきりに頷きながら部屋の中を見回した。正確には部屋をキョロキョロ見る夏希を視界に入れながら、だが。

「それじゃ、」

『いただきますっ！』

湊の音頭に合わせて、全員がいただきますと手を合わせる。鍋の中身を卵の黄身の入った器に入れて、パクリと一口。

「んっ！　なにこれちょー美味いっ！」

「ホント！　美味しいよ湊くん」

「そう言ってもらえて良かったよ」

「うーん、これに酒があったら完璧なんすけどね」

「佐久間、まだ未成年だよね」

くーっ。と肉を食べる佐久間にジト目で健二が突っ込んだ。
その光景にみんなが笑って、それからまた鍋の中身に手をつけ始める。
何故夏希と枝里子まで湊の家にお邪魔しているかと言うと、それは少しばかり時間を巻き戻すことになる。

一一一一一一一一一一一一

「文化祭の会計表、ですか？」

「そうなの。生徒会にパソコン強い人がいなくって」

物理室にて、お願い。と手を合わせる人が二人。夏希と枝里子なのだが、生徒会の会長と副会長である二人は物理部の健二と佐久間にそんなことをお願いしに来ていた。
湊はそれを横目で見ながらマグカップにお茶を注いでいる。客用のもちゃんとある辺り意外としっかりしているようで、とりあえず座

ったら。とテーブルにマグカップを置いていた。

「小磯くんも佐久間くんもパソコン強いし計算も早いじゃない？
だからウチらに協力してもらえないかなぁと。あ、このお茶美味しいね」

「数少ない部費の使い道っスから」

霧島枝里子は、先ほどにも述べたが生徒会副会長である。夏希とは高校入学からの友人であり、仲の良い友人であることは確かだ。眼鏡をかけて長い黒髪は両脇にお団子に結ってあり、理知的な雰囲気の容姿とそれを一発で払拭する気軽で話しやすく明るい性格から、夏希と並んで人気が高い。ウチと言うのに標準語で話すのは密かにみんなに疑問に思われていたりするが、本人曰く「秘密の多い女はかっこいい」とのことらしい。
クラスこそ違うが、よく夏希と物理室に来ていたりするので湊や健二、佐久間とも会えば話をする程度には知り合いで、今回はそんな物理部にお願いをしに来たわけなのである。

「んで、それなんですけど別に受けてもいいよな、健二」

「うん。ただ、ちょっと今日は止めて欲しいかなぁって……」

「え、なんで？」

「すいません、今日はその……」

「湊先輩の家ですき焼きやるんですよ」

健二の後を佐久間が続ける。そうなの？　と言わんばかりに湊を見た夏希に、湊は頷いて返した。

「ふむふむ、まずったなぁ。結構急ぎなんだけど」

「え、そうなんですか？」

「うん。ちょっと間に合わなくって」

そんなことを言われてどうしよう。と悩む健二に佐久間。
すき焼きは魅力的だが、やはり文化祭も成功させたい。ならば、と
健二は申し訳なさげに湊へ振り返って、

「じゃあ、うちでやる？」

「え？」

「早めに行って、すき焼き食べて、それからやる？」

湊の提案に、思わず頷いてしまったのだった。

一一一一一一一一一一一一

「ふぃー、美味しかったねー」

「ホントホント。けど、手伝わなくていいのかなぁ」

「先輩の家の台所は乗員二人が限界ですから。と、先輩！　パソコン借りまーす」

「わかった」

湊の声が返って来て、佐久間はパソコンを立ち上げた。
隣には健二が持って来たパソコンがもう立ち上がっており、リスのアバターがこちらを見つめていた。

「うわ、先輩偉いな。毎回ログアウトしてるのか……」

湊のパソコンから自分のアカウントへログインし、佐久間は眼鏡猿のアバターを出現させた。頭上には”サクマ”と名前が書かれている。

「それじゃ佐久間、やろっか」

「あれ、皿洗いは？」

「あと少しだから、先輩がやってくれるって」

「そっか。んじゃやりますか」

枝里子に渡された資料を目に通して、二人は作業を開始する。
その手際は非常に良く、並の高校生じゃこれほど早く、正確にできないだろうと素人である夏希や枝里子にも理解できた。

「すごっ」

「うん。さすが物理部だね」

なんて言いながら、二人はパソコンの画面を見つめた。
少し経って暇になったのか、不意に枝里子がリビングを見回しながら夏希の肩を叩いた。

「で、どーなのよ」

「？　どうって、何が？」

「有里くんの家。初めて来たんでしょ？」

「んなっ……」

顔を赤くして後ろに下がる夏希に、枝里子はニヤニヤ笑いを隠さずに距離を詰めた。
しまった。と思ったりする夏希だが、もう遅い。

「アレだよね。ベッドの下とか気にならない？　有里くんの趣味嗜好、気になったりしない？」

「え、えええっ！？」

さすがに高校三年生にもなれば、純真無垢ではいられない。枝里子

の言いたいことがわかってしまった夏希は、その顔を一層赤くさせた。

「げ、下品よそんなの！」

「でも、気にならない？」

前にも言ったが、夏希の恋愛感覚は大正時代から抜けていない。”そういうこと”はお嫁に行ってから。とか本気で思ってるわけであり、男子がそういう本を持ってることは知ってこそいるが、極力頭の中からごく自然に排除されている。
だが、好きな相手のこととなれば話は別になるのだが……そこで、佐久間が小さく笑った。

「夏希先輩的には朗報っス。残念ながら湊先輩はそういう本を持ってないんですよ。本棚は小説とか漫画ばっかだし」

「え？」

「それは、もしやベッドの下には何もないってこと？」

「その通り。残念でしたね、枝里子先輩」

「……有里くん、健全じゃない……」

「そういう本を持ってる方が健全じゃないって！」

「いやいやいや、今を生きる男子がエロ本の一つも持ってないなんて、それ危なくない？　ウチだって持ってるよ？」

「それは枝里子が変なのよ！　この話はもう終わり！」

遂にリンゴのように真っ赤になった夏希がバン。とテーブルを叩いて、満足した枝里子が「はいはい」と笑って終わりになったのだった。

「ま、せっかくなんだからこれからちょいちょいお邪魔したら？
家の場所もわかったんだし」

「それは……その……」

「……はぁ。あのね夏希、そうやって一昔前の少女漫画の主人公やるのはいいけど、多少は前に出ないとダメだよ？
特に有里くんみたいなのは押しの強い女の子に弱いんだから」

額に手を当てて嘆息しつつ、枝里子は人差し指を立てて説明する。夏希の恋心を知る数少ない一人であり、親友だと思ってるからこその言葉である。それをわかってるからか、夏希は何も言わずに枝里子の言葉に耳を向けた。

「ああいうタイプはガンガン行かないとダメよ？好きって言われなきゃ自分への好意を理解できないタイプなんだから。脈アリって言葉がないのよ、あの手の鈍ちんは」

「そ、そうなの？」

「そう！　思い切って告白するのもありかもね」

「こ、告白！？」

「……先輩、聞こえてないのかな」

「どうだろうね……」

後ろの二人のやり取りに苦笑しながら、健二と佐久間は資料の中身を進めていく。

会話に加わらずに進めていたからか、作業はかなり進んでおり、も

う少しで枝里子の指定した一区切りがつきそうなところだった。
そんな健二の画面に、一通のメールが差し出される。

「うん？」

画面に現れた封筒は、健二のアバターであるリスが持っているのではなく、不気味な雰囲気を持った、黒い封筒。
一一健二の背中に、寒気が走った。

「さ、佐久間。これ……」

「どうした健二。っておい……」

クリックするか悩むと、それはヒヒヒ。と高い声で笑って、自分から封筒の中身を開いて広げたのだった。

一一一一一一一一一一一一一

「……理一さん？」

皿を洗い終えた湊は、着信音に反応して携帯を取り出し、その相手に首を傾げた。
居間はまだ盛り上がってるようだから、少しくらい遅れても平気か。

と思って彼は通話ボタンを押した。

「やぁ、湊くん。久しぶりだね」

「はい。お久しぶりです」

夏に聞いた時と変わらない声が聞こえて、湊は返事をした。どこか警戒するような、そんな気配のする声色だが、湊にはその理由がわからないので理一の出方を伺うことにする。

「突然すまないね。今、大丈夫かい？」

「はい」

良かった。と、理一が電話越しに笑った。心から安堵したらしいそれに、湊はますます首を傾げる。
どういうことなのだろう。と、画面に映る理一のアバターを見つめた。

「今から聞くことは、もしキミにとって不快なことならそう言ってくれて構わない。
これは俺が独自で調べたもので、そのうちのいくつかは信憑性が薄いものだから」

「？　はい。わかりました」

「湊くん、キミは去年……と言うか今年の一月くらいまで流行った”無気力症”を覚えているかい？」

「！！」

「覚えているみたいだね。それと、今流行っている”ジョーカー様”も知ってるかな」

「……はい」

なんとなく、理一の言いたいことがわかってきた。と湊は唾を飲んだ。
おそらく、理一は去年の出来事に自分が絡んでいることもわかってる。そう、確信した。

「うん。それじゃあ単刀直入に聞くよ。湊くん。いや、頼むと言った方が正しいね。
一一キミの知ってることを教えてくれ」

「！！」

「俺の勘だったんだが、電子と現実が混ざるなんて本来あり得ない。あり得ないんだが、俺はそれを目の前で見てる。ラブマシーンがパソコンから出て来る姿をね。
そして、キミはそれを撃退した。もちろんそれをとやかく言うつもりなんてないよ。湊くんはうちの恩人だし、期待の婿殿だからね」

「だからそれは……」

「まぁ、それはさておき、だ。俺はこの事件”ジョーカー様”を調べてる。調べてるんだが情報も少なく理解不能過ぎて手がつけられないんだ。だから、キミに賭けた」

「そうしたら、僕が何か知っていた？」

「その通り。答えてもらえるかい？　大丈夫、キミの安全は俺が保障する。しなかったら夏希や佳主馬辺りに何をされるかわかったもんでもないしね」

画面越しに笑う理一に、湊も思わず笑ってしまった。
陣内家の人は、こうして話していてとても暖かい。だからだろう、すぐに湊は頷いていた。

「ありがとう。では一一」

「湊くん！」

「あれ、夏希？」

「え、理一おじさん？　どうして湊くんと電話を？　って違うの！　健二くんに来たのよ」

二人の会話を遮って、夏希が慌てた様子で台所に飛び込んで来る。尋常ではないその様子に、湊も理一もどうしたのだろうと首を傾げる。

「健二くんに、”ジョーカー様”からメールが来たの」

「「っ！！」」

湊の瞳が動揺に揺れた。携帯を握る手の力を強め、ゆっくり息を吸った。

「理一さん、後でこっちから電話します」

そう言って一方的に通話を切り、湊は深くため息を吐いた。

「来たんだよね？」

「うん……」

「……大丈夫。簡単な願いを書けばいいんだから。とりあえず行こう」

携帯をポケットにしまい、湊はリビングへと戻って行く。

そんな湊を心配そうに見ながら、夏希も後に続いたのだった。

第三話"日常"（後書き）

ペルソナキャラやらオリキャラが出るちょっと忙しい回でした。

頭の中にあるイメージを文に表現するってやっぱり難しいことですね。

まだまだ書きたいことがいろいろあるからしっかりがっつり書きたいです。

ではでは、次回の後書きで会いましょう！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5300n/

ペルソナ3-SW-Fes

2010年10月9日02時41分発行